

グローバル化と日本語教育政策  
—アイデンティティとユニバーサリティの相克から公共性への収斂—

【目 次】

はじめに：「日本語は世界でも有数のことばである」	1
<b>序 章：研究の目的</b>	2
1.研究の目的	2
1.1 国際相互依存の深化	2
1.2 言語とアイデンティティ	4
1.3 多言語化する国際社会	5
1.4 ナショナル・アイデンティティとグローバル・アイデンティティ	6
1.5 日本語の言語政策	7
1.6 「戦後」へ	8
1.7 国際文化交流と日本語教育	10
1.8 日本語教育のジレンマ	11
2.本論文に関連する先行研究	13
3.本論文における概念の定義	20
3.1 「アイデンティティ」、「ユニバーサリティ」、「公共性」	20
3.1.1 「アイデンティティ」	21
3.1.2 「ユニバーサリティ」	22
3.1.3 「公共性」	22
3.1.4 「アイデンティティ」と「公共性」の連関に介在する 「ユニバーサリティ」	23
3.2 その他（「ナショナリズム」、「エスニシティ」、「多文化・多言語主義」）	25
3.2.1 「ナショナリズム」	25
3.2.2 「エスニシティ」	26
3.2.3 「多文化・多言語主義」	27
4.本論文の構成と展開（第1章から第5章へ）	29
<b>第1章：日本語教育の現状と展望</b>	32
1. 「原点」、「転換点」、そして「現時点」	33
1.1<明治改革期>日本人と日本語の自己認識のための「他者」	33
1.2<明治後期～戦中期>日本人と日本語の自己認識のための「他者」	36
1.3<戦後～経済成長期>日本人と日本語の自己認識のための「他者」	39
1.4<グローバル化する現在>日本人と日本語の自己認識のための「他者」	44

1.4.1 国際交流基金と「海外日本語教育機関調査」	44
1.4.2 基金設立直前の状況認識（1970年外務省調査）	45
1.4.3 「海外日本語教育機関調査」（通観：1974年－2006年）	46
2. 現状と展望	54
2.1 「オールド・カマー」と「ニュー・カマー」	54
2.2 「共生」と「同化」	55
2.3 「人間の安全保障」（ヒューマン・セキュリティ）	57
2.4 海外日本人子女の日本語教育（「バイリンガル」と「ヘリテージ」）	59
2.5 日本語変容の予感	60
<b>第2章：CEFRの衝撃</b>	<b>62</b>
1. CEの言語政策	63
1.1 草創期：1954～63年	64
1.2 発展期：1964～74年	65
1.2.1 成人教育向け学習ユニットに関するヨーロッパ・システムの創出	66
1.2.2 「意味・文法主義」から「概念・機能主義」へ	66
1.2.3 «Niveau Seuil»（敷居）と“Threshold”（敷居）	67
1.3 拡充期：«langues vivantes» 1978～81年	68
1.4 完成期：1990～97年	
«Apprentissage des langues et citoyenneté européenne» （言語学習とヨーロッパ市民権）	69
2. CEFRとELP	70
2.1 2つの“-ism”と2つの「能力」	70
2.2 CEFR（「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」）	72
2.3 ELP（European Language Portfolio）	75
<b>第3章：グローバル化時代における言語教育の公共性</b>	<b>79</b>
1. 「グローバリゼーション」以前の公共性	79
1.1 歴史的概観—「家族」と「ポリス」—	79
1.2 私的領域と公的領域	80
1.3 「市民的公共圏(性)」の勃興	81
2. 「グローバル時代」の公共性	83
2.1 包括的現状認識	83
2.1.1 多極化（「クモの巣」）	83
2.1.2 公益、国益、そして国際公益	85

2.2 具体的現状認識	86
2.2.1 CEFR の公共性と公益	86
2.2.2 日本語教育の公共性と公益、そして国際公益 —CEFR との相関—	90
3. 「言語政策」から「言語管理」へという公共性	94
3.1 言語政策論的アプローチ	95
3.2 言語管理論的アプローチ	96
4. 再び「日本語は国際語になりうるか」	99
<b>第4章：日本語教育—アイデンティティとユニバーサリティの相克—</b>	<b>100</b>
1. 「文化財」としての日本語、「国際語」としての日本語	101
1.1 2つの命題	101
1.2 「文化財」としての日本語という言語観	102
1.3 「社会資産」という言語観	104
1.4 «langue nationale» と「国語」	105
1.5 「国際語」としての日本語という言語観	108
2. 国立国語研究所と日本語学会	112
2.1 戦後の「国語」論議	112
2.2 志賀直哉の日本語廃止論	114
2.3 国立国語研究所	116
2.4 日本語学会	118
3. 日本語のアイデンティティとユニバーサリティの相克	120
3.1 「国語」をめぐるアイデンティティとユニバーサリティ	120
3.2 「日本語」をめぐるアイデンティティとユニバーサリティ	122
3.3 「JF 日本語教育スタンダード」	125
<b>第5章：結論として—日本語教育、公共性への収斂—</b>	<b>127</b>
1. 再び、アイデンティティをめぐる	127
2. 再び、ユニバーサリティをめぐる	131
3. 再び、公共性をめぐる	138
4. 政策的私論（骨子）	142
5. 再び、ユートピアをめぐる	148
<b>おわりに：謝辞として</b>	<b>151</b>
<b>参考引用文献一覧</b>	<b>153</b>